

開山1300年を迎えた白山



ブナの原生林

奈良時代の養老元年(717年)、越前の僧^{たいちよう}泰澄によって開かれたとされる白山は平成29年(2017年)、開山1300年の節目を迎えました。古来、生活・農業用水を供給し、信仰の山として人々の崇敬を集めてきた白山は、その一方で活火山としての存在が畏怖の対象にもなってきました。白く、たおやかな峰々と美しい自然が悠久の時を経て人々を魅了し続ける白山の特徴を紹介します。

1. 原生林がよく残る貴重な山岳地域の一つ

「樹海美」を誇るブナ原生林と豊かな生態系

白山の標高1,000～1,600mの山腹にはブナの原生林が広がり、そこに息づく手つかずの自然が白山の大きな特徴の一つになっています。落葉広葉樹のブナ林は四季折々、実に豊かな表情を見せてくれます。風雪に耐える冬の枯れ枝から春の芽吹きと新緑、夏の鮮やかな緑、そして秋の黄葉へと変化する色彩の移ろいは、まさに「樹海美」と呼ぶにふさわしい美しさです。イギリスではブナの樹相が女性的で優美なことから、「森の母」と呼ばれています。

ブナの原生林では、スギなど人工林には見られない複雑でバランスのとれた生きもの世界があり、文字通り白山の豊かな生態系の「母体」となっています。春

には膨らみ始めたブナの芽をウソやヒガラなどの鳥がついばみ、ツキノワグマやニホンザルが木に登って甘みのあるブナの花を食べています。夏は多くの種類の鳥がブナ林で巣を作り、秋は栄養豊富なブナの実を求めてツキノワグマやニホンザル、リスなどの動物が集まります。

ニホンカモシカやオコジョなども含めた白山に生息する哺乳類は40種を超え、県鳥のイヌワシをはじめとする鳥類は約130種に及ぶとされています。ブナを中心とした自然林に生息する白山の動物の豊富さは全国に知られています。こうした豊かな自然が国内外で高く評価され、昭和37年に国立公園に指定され、その後、ユネスコエコパーク(生物圏保存地域)、国指定鳥獣保護区、文化庁カモシカ保護地区、林野庁の森林生

態系保護地域などに指定されています。

翼を広げると約2mに達するイヌワシは、国内希少野生動植物種に指定されている絶滅が懸念される鳥です。白山で比較的多く生息しているのは、繁殖期に豪雪が人を寄せつけないことに加え、エサとなるノウサギやヤマドリ、ヘビ類などが多く生息しているためと考えられます。

白山の豊かな生態系を支えるブナ林の役割の中で忘れてならないのは、雪解け水や雨水を貯える水源かん養や、土砂流出を防ぐ機能です。白山麓の集落では、裏山のブナの林を伐採することなく残し、雪崩や山崩れの防止に役立ててきました。経験的に“自然のダム”であるブナ林の恩恵を知っていたからでしょう。

最西端の高山帯が育む天然のお花畑

御前峰(2,702m)、大汝峰(2,684m)、剣ヶ峰(2,677m)の三峰を中心とする白山は、日本屈指の積雪の多い山であり、高山帯を有する山としてはわが国最西端に位置しています。このため白山を分布の西限とする植物が100種以上もあります。

白山は3,000m級の山々が連なる日本アルプスから遠く離れており、日本の屋根と呼ばれる山脈の西に浮かぶ“孤島”ともいえます。白山は高山帯の面積が少ないわりには高山植物が豊富なことで知られ、その要因の一つに積雪の多さが考えられます。また、江戸期以降、様々な学者が白山に登ったことから、高山植物には白山にちなんだ名が多く付けられています。ハクサンコザクラ、ハクサンイチゲなど標準和名で「ハクサン」の付く植物は18種類を数え、山の名前を冠した植物の数では日本有数です。これらは白山のみにしか



ハクサンコザクラ



クロユリ

生育しない固有種ではありませんが、白山の高山植物が早くから人々に知られていたことを物語っています。

白山の高山植物の花が一斉に咲き誇る「お花畑」の美しさはよく知られています。そのお花畑の中心は、夏まで雪が残る雪溪から供給される豊かな水分によって形成された草原です。石川県の「郷土の花」であるクロユリは標高約2,000m以上に群生し、特に室堂周辺などで大きな群落を見ることができます。

コラム① 修行のための白山登山

白山を開いたとされる泰澄は、山頂に留まり千日修行したと伝えられています。その後、多くの僧が修行のために白山に登るようになり、登山のための道が作られました。この道を「禅定道」といいます。禅定とは靈山に登って修行することを指しています。

白山の禅定道は、越前、加賀、美濃の三国から山頂に通じる越前禅定道、加賀禅定道、美濃禅定道の三本があります。禅定道の起点となった場所は、「馬場」と呼ばれる信仰の拠点であり、現在の「平泉寺白山神社(福井県勝山市)」、「白山比咩神社(石川県白山市)」、「長滝白山神社(岐阜県郡上市)」がそれにあたります。



白山比咩神社

2. 古い白山火山と新しい白山火山

白山火山のあゆみ

1960年代からの白山火山の調査の結果、現在の山頂部を活動の中心とする火山「新白山火山」のほかに、活動場所や活動年代が異なる「加賀室火山」と「古白山火山」があることがわかっています。

最も古い「加賀室火山」が誕生したのは30～40万年前で、長い間の侵食作用で火山体のほとんどが失われています。この火山の噴出物は尾添尾根から目付谷にかけての斜面などに見られ、噴出物が分布する稜線には加賀禪定道が通っています。

約10万年前に形成された「古白山火山」は標高3,000mを超える火山だったと推定され、山頂部は侵食で失われています。かつての火山活動の中心は現在の中ノ川支流の地獄谷付近にあったと考えられ、火山体の山腹斜面の一部は尾添尾根の東側の清浄ヶ原となって残っています。

3、4万年前に活動を開始した火山が「新白山火山」



地獄谷

で、現在の山頂部に見られる小火口などの火山地形はそのときの噴火によるものです。そのいくつかは翠ヶ池などの池となり、千蛇ヶ池のように一年中雪渓が残るものもあります。御前峰、大汝峰、剣ヶ峰は新白山火山の活動で形成されたもので、山頂周辺や東方の大白川、南方の弥陀ヶ原、南竜ヶ馬場などには溶岩を中心とした噴出物が分布しています。

生きている白山火山

新白山火山は歴史時代に入ってから活動が続けられており、気象庁のホームページには有史以降5回の噴火活動が記されています。その中で最も古いのは平安時代の長久3年(1042年)で、噴火場所は翠ヶ池火口、あるいは千蛇ヶ池火口と推定されています。

その後は、戦国時代の天文16年(1547年)、天文23年～弘治2年(1554～56年)、天正7年(1579年)と、約30年の間にたて続けに3回も噴火しており、火山灰などの噴出物、小規模な火砕流、噴石による白山



翠ヶ池(左下)、剣ヶ峰(左上)、御前峰(右上)

コラム② 白山の自然の恵みを活かした生活文化

日本が高度経済成長に入る以前は、米作が困難な白山麓では「焼畑」が行われていました。これは、山腹斜面の樹木を伐採、焼却して土壤に養分を与えることにより、ヒエ・アワ・ダイズ・ソバなどを栽培する農業です。

焼畑に適した山腹斜面は集落から離れているため、人々は焼畑の近くに出作り小屋を建てて焼畑耕作に従事していました。こうした出作り生活では、畑作物以外にクマ・ウサギ・川魚やキノコ・山菜も貴重な栄養源となり、製炭や養蚕で現金収入を得ていました。

こうした生活は今ではほとんど見られなくなりましたが、そこには自然と共生しながらその恵みを上手く享受する生活の知恵が活かされています。



出作り小屋(昭和30年代中頃)

奥宮正殿の破損、手取川の濁りで魚が死んだといった被害が記録されています。最も新しい噴火は江戸時代の万治2年(1659年)で、4月、7月、8月に火山灰などの噴出物の降下が発生しています。

噴火ではありませんが、昭和10年(1935年)には山頂の南西約2kmの千切滝^{せんじんだき}付近で噴気孔が出現し、数カ所^カで地鳴りを伴い吹き上がる噴気活動が確認されました。噴気活動はやがて鎮まりましたが、この異変は

万治2年の噴火以降も白山が火山活動を続けている一つの証拠と考えられます。活火山に分類される白山火山は将来噴火を再開する可能性のある火山であり、平成25年には気象庁、石川県、白山市など関係機関からなる「白山火山防災協議会」が設立されました。これは白山の噴火時の避難対策に関する検討を行い、火山災害の防災体制を推進し、地域住民の防災意識を高めることを目的としています。

3. 自然環境の保全

石川県白山自然保護センター

白山の自然環境の保全と適正な利用の推進を目的として、昭和48年(1973年)に県白山自然保護センターが設立されました。

主な業務のうち、保護管理として、白山国立公園の各種施設の管理や維持補修、マイカー規制、登山指導などを行っています。調査研究では、クロユリの開花時期や外来種などのモニタリング、ツキノワグマの餌となるブナ科果実の豊凶予測、大型動物の生息状況のほか、白山火山や自然と人との関わりなどにも取り組んできました。これらの調査研究の成果は、毎年、研究報告にとりまとめて発行するほか、「普及誌はくさん」や「自然誌シリーズ」、あるいは「白山まるごと体験教室」や「県民白山講座」などの普及啓発事業にも活かされています。

また、同センターが管理運営する施設のうち「中宮



ブナオ山観察舎



外来植物除去作業

展示館」や「市ノ瀬ビジターセンター」では、白山国立公園の利用者に対し、白山の自然や歴史・文化の紹介、登山に関する情報提供などを行っています。冬期に開館するブナオ山観察舎は、ニホンカモシカやイヌワシ、ツキノワグマなどを自然のままの姿で観察できる日本でも稀な施設であり、来館者に喜ばれているほか、動物の生態調査にも役立っています。

白山の自然環境を守る活動

高山植物は人の踏みつけには非常に弱く、登山道を踏み外して歩いたところは、すぐに枯れて裸地になってしまいます。裸地化した室堂平の植生について、県白山自然保護センターが昭和48年(1973年)から行った追跡調査では、30年経っても調査区画の約20%は植生が回復していませんでした。

これまで白山では高山植物の生育地を保護するため一帯が国立公園に指定され、開発行為を制限するとともに、登山者の踏み荒らしによる植生破壊を防ぐため、登山道が整備されてきました。さらに、土壌の流出防止や植生を復元するための工事の際には、白山以外からの遺伝子の混入を防ぐため、工事現場周辺にある植物から種子を採取し、播種や移植するなどの方法で種の保護を図ってきました。

登山者の靴や衣服などに種子が付着して運ばれるオオバコなどの低地性植物は、在来の植物の生育を阻害したり、高山植物と交雑して雑種を作る可能性もあります。このため石川県は、平成13～15年度に実施した「白山高山帯保全対策調査・検討会」で決めた方針のもと、平成16年度から「白山外来植物対策事業」で外来植物の除去作業を開始しています。

これらは白山の自然環境を保護する活動の一部ですが、一度破壊されると元に戻るのに長い年月がかかる高山の植生を守るために様々な取り組みが続けられています。



座談会

出席者 (左から)

おくなまさたか
奥名正啓氏

(石川県自然解説員研究会会長)

きたむらゆうこ
北村祐子氏

(白山一里野温泉観光協会おかみの会副会長・
岩間山荘おかみ)

いちほら
市原あかね氏

(金沢大学人間社会研究域経済学経営学系教授)

とがのりまさ
梶典雅

(石川県白山自然保護センター所長)



独立峰・豊かな自然・独自の歴史 …多彩な顔を持つ魅力あふれる山

白山は千年以上も前から人との関わりを持ちながら今なお豊かな自然を保ち、山麓に独自の文化を育んできた。そんな白山の魅力と適正な利用について、この山と深く交わってきた四氏に語っていただいた。

梶●白山との関わりは金沢大学のワンダーフォーゲル部時代に登ったのが初めてで、以来、毎年のように登ってきました。現在、白山自然保護センターに勤務していますが、一つの山域を対象にしたこのような施設が早い時期にできたことは、県や県民の白山に対する思いの深さの表れだと思っています。

市原●私はエコロジー経済学が専門で、平成25年に「白山しらみね薪の会」の立ち上げに関わり、白峰地区の屋根雪を解かず熱源として山の薪を利用するなど白山麓の新たな生活スタイルを研究する活動に取り組んできました。白山は豊かな自然が残っていますが、金沢からわりと短時間で来れるのがいいですね。

北村●私は白山麓の鳥越に生まれ育ち、尾添に嫁いで35年が経ちました。旅館業を営む中で、猟師である夫や夫の父から毎日山の話の間かされて暮らしてきました。亡くなった父から聞いた加賀禪定道や白山の自然

に関する話を、毎年1冊ずつ『伝えたい白山』と題した絵本にまとめ、すでに5冊を発行し、現在6冊目の発行を準備しているところです。

奥名●石川県自然解説員研究会では、毎年、夏に1カ月、白山に常駐して自然観察会を開き、登山者に白山の魅力を紹介しています。室堂や南竜ヶ馬場のような標高の高いところでの自然観察会は白山ならではのものです。長く続けていきたいと思っています。

梶●近年の白山登山者は年間4～5万人で、このうち室堂や南竜ヶ馬場などで宿泊する人は約6割です。7～8割の登山者は日帰りが可能な砂防新道を使いますが、北部白山の加賀禪定道や中宮道などを歩くと白山本来の奥深い魅力を味わえると思います。ただ、北部白山のコースを歩くには途中の山小屋で一泊したり、そのための装備も必要なので、登山者は限られます。「エコツーリズム」によるガイドトレッキングなども行われていますが、まだ一部であり定着していません。

奥名●四塚山(加賀禪定道沿い)や釈迦新道沿いにも素晴らしいお花畑があるのに、そちらへ行く人はほとんどいません。そんな魅力的な見どころに関する情報を上手く発信すれば、宿泊して白山を楽しむ人も増えるでしょう。白山は独立峰ですから、縦走とは異なる、滞在してじっくり楽しむところにこの山の魅力があると思います。



市原あかね氏

市原●確かにそうですね。私は以前は北アルプスや南アルプスの縦走を楽しんでいたのですが、滞在して白山の魅力味わうのもいいですね。

北村●山頂まで日帰りして山麓の宿泊施設に泊まる方もおられます。白山の魅力といえば、きれいで美味しい水が、動植物、土、人々を繋いでいることもその一つだと思います。地域おこしグルメの「白山百膳」で、提供する各店が白山の水を使うという原則をきちっと守っているのは白山への深い愛着があるからです。

市原●確かにそうですが、過剰に観光地としての利用が進めば、白山本来の自然の魅力を味わえなくなる問題が生じます。

市原●確かにそうですが、過剰に観光地としての利用が進めば、白山本来の自然の魅力を味わえなくなる問題が生じます。

榊●信仰の山としての一面を持つ白山には、「遥拝」といって、人々が麓や遠くからこの山を拜んできた歴史があります。今でも、白山周辺の山に登って白山の眺望を楽しむ人が多くいます。富士山はどこから見ても同じような形ですが、白山は見る方向によって見え方がまったく異なるので、周辺の山から白山を眺めて楽しむという文化として広めていくのも良いと思います。



榊 典雅

北村●最近、うちの宿に宿泊されたお客様は、お住まいがある名古屋のビルの8階から白山が見えると言っていました。近所のお年寄りからその山が白山であることを教えられて感動し、白山を訪れてみたくなったそうです。

奥名●北陸新幹線開業の影響でしょうか、近年、外国人の登山者によく出会いますし、話しかけられることもあります。短パンにTシャツといった軽装で登る外国人の姿も見かけます。

市原●どのような形で外国の人に白山に関する情報が流れているのか気になりますね。

市原●どのような形で外国の人に白山に関する情報が流れているのか気になりますね。

北村●最近はSNSなどのサイトに白山に登った話がよく投稿されています。

榊●SNSでは、「短時間で簡単に登れた」などと書き込んであったりして、それを鵜呑みにした人が危険な目に遭うといった問題も起きています。白山には多くの魅力がありますから、正しい情報を発信して上手く利用してもらえればいいと思います。

北村●素晴らしい魅力にあふれる白山を多くの人に味わってほしいですね。

市原●確かにそうですが、過剰に観光地としての利用が進めば、白山本来の自然の魅力を味わえなくなる問題が生じます。

榊●「世界自然遺産」が自然をそのまま保護・保全することを目的としているのに対し、白山が指定を受けている「ユネスコエコパーク(以下「エコパーク」)」(*キーワード説明参照)は、生態系の保全と利活用の調和を目的としています。ですから、エコツーリズムの推進も含めて、エコパークとしての白山の魅力を国内外に情報発信していけばよいと思います。

奥名●エコパークの概念がまだよく知られていないので、エコパークとしてどのような取り組みをしていくのかを明確に打ち出すことが必要かと思えます。

市原●自然を守るべき区域でしっかり自然を保護し、自然の恵みを活かしながら地域開発を図る区域では生活文化を再構築するプログラムを提示できれば、世界的にも面白い取り組みになるでしょう。

榊●白山信仰とも関係があると思いますが、千年以上も前から人が入り込んでいるわりには、自然がしっかり残っているところがすごいですし、そんな歴史を踏まえた白山ならではのエコパークとしての取り組み方や魅力の打ち出し方がきっとあるはずですよ。それには、民・学・官が連携協力して取り組むことが重要だと思います。



北村祐子氏



奥名正啓氏

キーワード説明

ユネスコエコパーク(生物圏保存地域)

ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)が登録認定する。2017年6月現在、120カ国669件、日本で9件が登録されている。自然と人間社会の共生に重点が置かれ、登録地域は「核心地域」「緩衝地域」「移行地域」の3地域で構

成される。「核心地域」は厳格に保護され、長期的な保全が図られている。「移行地域」では人々が生活しており、自然環境の保全と調和した持続可能な地域社会発展の取り組みが行われる。「緩衝地域」は「核心地域」と「移行地域」の間に位置し、「核心地域」保護のための教育等が行われている。